

## 1. 判断論

Kuroda (1972)は「犬は走る」のような複合判断 (categorical judgement) と「犬が走る」のような単独判断 (thetic judgement) の区別を言語分析に導入し、日本語は「は」と「が」の違いが判断に対応するとした。複合判断は主語の個体を取り上げ述語の属性を帰する叙述を表す判断であり、単独判断は事態の描写を一体的に行う判断である (Ladusaw (1994))。単独判断は叙述を表さず、「主語無し文 (subject-less sentence)」とも特徴づけられる。

日本語に対して英語はイントネーションが判断の違いを標示すると考えられてきた (see also Tokizaki (2008))。

(1) a. The BUTter MELTed. [categorical] / b. The BUTter melted. [thetic] (Sasse (1987: 520))

しかし、統語構造を介さずに意味と韻律が結びついているとしたならば、それは Y モデルへの反例となってしまう。そこで本稿では、英語の判断は(2)の統語構造によって標示されていると提案する。これは、統語構造が意味表示への最適解を提供するという近年の極小主義の想定 (cf. Chomsky (2024)) に沿った提案である。

(2) a. Categorical: [TP SUBJ T [P v V ...]] / b. Thetic: [TP \_\_\_ T [vP SUBJ v V ...]]

単独判断の構造では、後統語的移動が適用されて主語が T に先行するようになるかと仮定しておく。以下、本稿の提案(2)から得られる経験的な帰結を提示することによって、(2)の妥当性を示していく。

## 2. イントネーション

まず(1)に挙げた韻律上の違いを説明する。Selkirk (2011), Ishihara (2014)に従い、語彙範疇の最大投射のうち、他の語彙範疇に直接支配されていない投射が音韻句に写像されると仮定する。(2)は(3)のようにフレーズングされる。なお、機能語は隣接する音韻領域の内部に取り込まれる (Ito and Mester (2009))。

(3) a. Categorical: (SUBJ) (T v V ...) / b. Thetic: (T SUBJ v V ...) → (SUBJ T v V ...)

音韻句が句アクセントの付与領域であることを踏まえると、(3a)は double peak のアクセントが、(3b)は single peak のアクセントが与えられることが予想される。これは(1)の観察の通りであり経験的に正しい。

## 3. 文副詞の分布

続いて、文副詞の分布を見よう。Kiss (1996)は、文副詞は複合判断主語の直後には挿入できるが、単独判断主語の直後には挿入できないという違いを報告している。

(4) a. Boys luckily know the novels of Karl May.

b.?? Boys luckily were born.

(Kiss (1996: 129))

ここで、McInerney(2022)に従って挿入句は音韻句境界に挿入されると考えよう。この仮定の下で(3a, b)の音韻句を改めて考えると、複合判断主語は単独の音韻句を形成するために音韻句境界が後続する一方で、単独判断主語の後には音韻句境界が存在しないことに気付く。このフレーズングの違いから文副詞の分布も正しく導かれる。

## 4. 裸複数形の解釈

本稿の提案は裸複数形の解釈も説明する。通常、焦点化された裸複数主語は (個体レベル述語と共起した場合でも) 総称解釈と存在解釈の間の多義性を示す。

(5) BOYS know the novels of Karl May the best. [generic /existential]

(Kiss (1996: 130))

ところが、主語の後に文副詞を挿入すると総称解釈しか許されなくなる。

(6) BOYS, in my opinion, know the novels of Karl May the best. [generic /\*existential]

(Kiss (1996: 130))

この事実は次のように説明される。まず、(5)は複合判断と単独判断のどちらでもあり得るという点で構造的な多義性である。複合判断の場合、主語は TP 指定部で解釈されて総称解釈を受ける一方、単独判断の場合、主語は述部内主語位置で存在解釈を得る (裸複数形の解釈規則については Diesing (1992), 坂本(2025)を参照)。他方、文副詞が挿入された(6)では、文副詞の存在によって構造的な多義性が解消されて複合判断に解釈が固定される。なぜならば、主語の直後の位置への文副詞の挿入は複合判断主語の場合にしか許されないからである (3 節)。したがって、(6)の裸複数主語は一義的に総称解釈を受けることが正しく説明されることになる。

## 5. 主語名詞句からの外置

第四に、主語名詞句からの外置 (extraposition) について検討しよう。Kiss は複合判断に相当する文の主語は外置を許さない一方、単独判断に相当する文の主語は外置を許すと指摘する。

- (7) a. \* A man hit Bill with green eyes.  
b. A man appeared with green eyes. (Kiss (1996: 131), citing Guéron (1980))

名詞句からの外置が後統語的移動であると考え、(7a, b)の違いも音韻的に導くことができる。後統語的移動の局所性について Sakamoto (2025)は次の制約を提案している。

- (8) Post-syntactic reordering operates within a single phonological domain (i.e.  $\phi$ ). (Sakamoto (2025: 90))

(8)に基づいて、再び(3a, b)のフレーズングに立ち戻ろう。複合判断の主語は単独の音韻句を形成するため、(8)に従うと、後統語的移動操作に対する局所領域 (=島) を形成することが予測される。すなわち、複合判断主語は後統語的移動を許さないことが期待されるが、この予測は(7a)が非文法的である事実と合致する。他方、複合判断主語は単独で音韻句を形成しないため、後統語的移動に対する局所領域を形成しないことが予期される。そしてこの予測の通り、(7b)の外置は適格である。以上のように、主語名詞句からの外置の可否に関する(7a, b)のパターンも、本稿の提案から適切に導き出すことができる。

## 6. 否定極性項目の認可

否定極性項目(Negative Polarity Item: NPI)は否定要素にc統御されて認可される必要がある。しかし、文否定辞にc統御されない位置にある主語内のNPIが認可されうる場合がある。

- (9) a. A doctor who knew anything about acupuncture was not available.  
b. \* A doctor who knew anything about acupuncture was not intelligent.  
(Uribe-Etxebarria (1995: 579) citing Linebarger (1980))

一見するとこの対比は述語が個体レベル述語かステージレベル述語か、という問題に見える。ところが、ステージレベル述語ならば常にNPI認可が許されるわけではない。

- (22) \* A doctor who knew anything about acupuncture wasn't coming down the stairs. (Uribe-Etxebarria (1995: 580))

そこで、Uribe-Etxebarria (1995)は、述語が「漂白された」軽い意味の動詞であるかが重要だとしている。この特徴づけは、述語による述語を成さないという単独判断の特徴と同一視できる余地がある。このように考えた場合、(9a)が許されるのは、この文が(2b)の構造を持ち、そのために主語が否定辞より低い位置を占めているからだと考えられる。他方、複合判断の場合には主語はTP指定部を占めるためにNPI認可ができないことが適切に予測される。このように、本稿の提案は主語内のNPIの認可パターンも適切に予測することができる。

## 7. 結語

本稿は、英語の複合判断と単独判断について、両者の間には(2a, b)の統語構造の違いが存在することを提案した。この提案のもとで、イントネーション、文副詞の分布、裸複数形の解釈、主語名詞句からの外置、NPI認可に関する事実を統一的に説明できることを論じた。この分析が正しい限りにおいて、判断という意味の違いは統語構造を介して韻律に反映されていることになる。この提案はYモデルを保持することを可能にすると同時に、統語構造が意味表示に最適化されており、構造が意味を反映するという文法観を支持することにも繋がる。

## 参考文献

- Chomsky, Noam (2024) "The Miracle Creed and SMT," *A Cartesian Dream: A Geometrical Account of Syntax in Honor of Andrea Moro*, ed. by Matteo Greco and Davide Mocchi, 17-39, Lingbuzz Press. / Diesing, Molly (1992) *Indefinites*, The MIT Press, Cambridge. / Ishihara, Shinichiro (2014) "Match Theory and the Recursivity Problem," *Proceedings of FAJL* 7 69-88. / Ito Junko and Armin Mester (2009) "The Extended Prosodic Word," *Phonological Domain: Universals and Derivations*, ed. by Janet Grijzenhout and Baris Kabak, 135-194, Mouton de Gruyter, Berlin. / Kiss, Katalin É. (1996) "Two Subject Positions in English," *The Linguistic Review*, 119-142. / Kuroda, S.-Y. (1972) "The Categorical and the Thetic Judgement: Evidence from Japanese Syntax," *Foundations of Language* 9, 153-185. / Ladusaw, William A. (1994) "Thetic and Categorical, Stage and Individual, Weak and Strong," *SALT* 4, 220-229. / McInerney, Andrew (2022) "Parenthetical Niching: A Third-factor Phonosyntactic Analysis," *Syntax* 25, 397-415. / Sakamoto, Mizuki (2025) "Locality Follows from the Syntax-Phonology Matching: A Study of Heavy NP Shift," *Studies in English Literature* 66, 83-105. / Sasse, Hans Jürgen (1987) "The Thetic/Categorical Distinction Revisited," *Linguistics* 25, 511-580. / Selkirk, Elisabeth (2011) "The Syntax-Phonology Interface," *Handbook of Phonological Theory* (Second Edition), ed. by John Goldsmith, Jason Riggle, and Alan C. L. Yu, 435-484, Wiley-Blackwell, Oxford. / Tokizaki, Hisao (2008) *The Syntax of Silence*, Hituzi Syobo Publishing, Tokyo. / Uribe-Etxebarria, Myriam (1995) "Levels of Representation and Negative Polarity Item Licensing," *WCCFL* 14, 571-586. / 坂本瑞生(2025)「 $\theta/\bar{\theta}$ -bar 区分と裸複数形の解釈」『日本英文学会第97回大会 Proceedings』